

長い時間をかけて、ほかならぬ人間自身をとらえ直すための出発点なのではないか。(音楽教室主宰)

注 ならずな出版(電話・〇三―三三六―七二九一)が取り扱っている。

## 「健康」再考

首藤 美香子

さあ、夏休み。解放感でいっぱいの子ども達に対して、親や保育者が真っ先に口にするかもしれない、「早寝早起き」「規則正しい生活をしよう」「海や山など自然の中で思いっきり遊んでみよう」「真

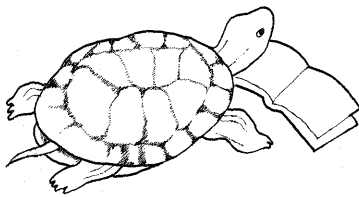
夏の太陽の下で身体を鍛えて元気で丈夫になろう」といった言葉ではないだろうか。冷房の効いた室内でゲームに没頭するなんてもつてのほかとばかり、朝早くから小学生と共に飛び起きてラジオ体操の列

に並ばせ、炎天下のなか水遊びに親ませ、郊外で自然の外気に触れる機会を作り、甘いものや冷たいものを制限し、子ども達が「おもしろくてためになる」ような遊興娯楽を求めて、大人は大汗をかきながらお子様サービスマン満載の「格闘する夏休み」を迎えることとなる。

こんなふうには私達は、子どもの生活において子ども達が「健康」であることに大きな価値を置いている。子ども達の健やかな成長発達を願い、病気に打ち克つ強い身体とそれを基礎に何事に対しても明るく前向きに取り組む積極的な意志を育むことは、大人の最低限の責務であると考ええる。子どもは身体が第一の資本であり、「健康」でさえあれば人生においてどんな可能性をも啓いていけるであらう、そんな期待のもとに、「休み」といえども一日だからと勝手気ままに過ごすのではなく、「適度の運動」と「正しい娯楽」、「十分な睡眠」と「栄養バランス

に配慮した食事」を柱にして、規則的に毎日を送れるように子どもの生活を組みたてようとする。それ自体、決して揶揄すべきことでも非難すべきことでもない。ただ、「健康的であること」に縛られた窮屈な夏休みではなく、もう少し肩の力を抜いて「堂々と怠けてのんびりした」夏休みもいいのではないか、そんな提案を含めて、「健康」の歴史を紐解いた一冊の本を紹介してみたい。

育児や保育の指針が多くの場合、その時代の社会情勢や文化的要請を反映しているように、現代において我々は「健康」を維持増強するためにはどんな努力も時間、コストも惜しまない「健康信仰」の只中に生きているといっても過言では



ない。「健康」の日本史』（北澤一利、平凡社新書）は、我々が自明視する「健康」という概念は実は明治維新前後に創製されたもので、それは単に医者が治療の目標とするような病氣から解放された状態を意味していたのではなく、近代化の過程で避けて通れない軍事政策や教育政策において、一般大衆の怠惰や自暴自棄を改める啓蒙のために効果的に使われた、いわば「国民の身体」に対する「国家権力による干渉」であったことを突き止めた。

北澤によれば、「健康」概念は江戸時代の終わりに西洋医学と共に導入され、「身体のすべての器官が過不足なく正常に働いている状態」というように生理学的に解釈されたという。それは儒教道徳に根ざし「欲をつつしむ」「善い」生き方の実践を示した「養生」とは大きく異なり、身体を「脆弱」で「未熟」なものと規定し、年齢や性別を考慮し「発育発達」段階に応じて「強度」や「頻度」を適切に

配分した「正しい運動」によって「強く鍛えて」いこうとする「改良」志向が背景にあったという。そして、「健康」の獲得は生理学的な法則に基いているが故に、その測定の方法や技術は常に改良されて正確さや精度を増し、どの程度健康であるかどうか客観的に判断される。結果として、人々はそうした健康を測定する客観的な尺度を自己内面化し、誰がみていなくても、しぶしぶと時として「喜んで苦しみながら」、自発的に健康法を実践していくようになったのだという。

「健康」の普及は、江戸時代の武術のようにもともと優れた体格や勇敢な精神をもつ武士などの特権階級を対象にしたのではなく、軍隊や学校での「体操」を通じて、庶民階級の筋肉や循環系統の機能の向上が目指され、特に子どもや非力な人間を対象にした場合により効果を発揮したという。ここで、「体操」を通じて求められたものは、ある特定の能

力の開花ではなく、最低限の身体能力の向上と集団の中で号令とともに一斉に秩序正しく行動する能力であったという。興味深いのは、明治二十年以降の運動会の広がり、学校に通う子ども達だけでなく親や学校の周辺住民に至るまで「健康」の重要さを認識させる契機となったという点である。

そして大正以降、「身体」の生理学的な発育発達のために行われるはずであった「体操」や「運動」が国民精神の高揚や道徳の向上のために行われるようになっていった。例えば、夏休みにおなじみのラジオ体操は、昭和三年に通信省簡易保険局によって企画されたものだが、中産階級以下の「健康」の保持と増進を目的にされ、ラジオという新しいメディアの勃興を背景に、「同じ時間」「同じリズム」「同じ体操」を行うことによって、「日本人としての体格や連帯感」を養う日本人のための特別な体操であったのである。ラジオ体操については、国民の身

体を西欧的基準に従って壮健にするという役割を担わされ、毎朝定時に日本全国を同時に動員する戦時下ファシズムの象徴であったという指摘が既になされてきたが、北澤もラジオ体操の普及は、身体に生理的な異常をもたないという明治維新以降築かれてきた健康観に加えて、国民としての道徳的な貢献が要求されていたと「健康」概念の変化を読み取っている。

以上、「健康」をキーワードにした日本近代史の野心的な読み解きを紹介してきたが、かつて「正常」という発達指標がもつイデオロギー性が看過され、その神話の脱構築が保育現場で試みられてきたように、個人の奮闘努力によって「未熟」「脆弱」「不良」な身体を生理学的な理想形に「改良」し、日常生活を規制するという過度な「健康信仰」についても、ひとたび思いを巡らしてみるといえるのがなものであろうか。本書は、既存の健康概念に

縛られない子どもの「健やかさ」を再考しようとする親や保育者の思索の一助となるにちがいない。

さて最後に、健康や身体、スポーツについて、歴史的文化的に分析した書物を一部挙げておきたい。

ラジオ体操が日常における時間感覚や身体観の近代化にどう関与したかについては、『ラジオ体操の誕生』（黒田勇、青弓社）が、運動会が子どもの身体とそれを圍繞する学校に対してどのような国家レベルの思想をどう浸透させていったかについては

『運動会と日本近代』（吉見俊哉ほか、青弓社）

が手に取りやすいだろう。また「健康神話」の大衆化を担った郊外住宅地の開発と民衆娯楽の開花を、

遊園地の歴史から追跡した『日本の遊園地』（橋爪紳也、講談社現代新書）は、懐かしい遊具の写真

が満載で楽しめよう。夏の風物詩、甲子園野球が織り成す文化的パフォーマンスを説明した『甲子園

野球のアルケオロジー』（清水論、新評論）は、

メディアが作り出すスポーツの「物語」のからくりを知る手がかりとなろう。「健康で清潔な生活」を形成するに不可欠とみなされることの多いスポーツについて、その成立と変遷を近代社会を写し出す鏡として考察する『スポーツを考える』（多木浩二、ちくま新書）は、オリンピックやプロサッカーに対する見解が興味深い。

（北京市在住）